

初山滋 見果てぬ夢

執筆者 上島史子

掲載誌 『初山滋 見果てぬ夢』（平凡社）

大正期の「童画」の創始者の一人として知られる初山滋。その作品の多くは雑誌や絵雑誌、絵本や童話集などの印刷物のために描かれ、今となっては入手しにくいそれらの印刷物に掲載された絵はあまりにも膨大で、まだ全貌は把握しきれていない。さらに版画の仕事については、国内より海外でより知られているといわれるほど、日本ではあまり認知されていない。本画集には、主にご遺族のもとで大切に保管されてきた童画作品の原画と、版画を中心に掲載させていただいた。遺された原画のなかには、画業の初期にあたる 20 代の頃の線画もあり、張り詰めたような鋭さのある、細く優美な線の完成度の高さには驚かされる。

初山は同時期に活躍した清水良雄や岡本帰一、武井武雄ら他の童画家たちが、美術学校で西洋画を学んだ経歴を持つのに対して、異色の経歴の持ち主であった。貧しさのなかで、早く手に職をつけるべく小学校のときに日本画家・荒木探令（後の狩野探令）のもとにしばらく通い、小学校卒業後は着物の模様画工房に奉公に出されて、日本の伝統美と職人魂を体に染み込ませた。人気の挿絵画家だった井川洗厓に弟子入りしてからは、挿絵の下絵描きをしながら、日本画家を志して異画会の研究会にも通った。浮世絵を好み、井川の持っていた浮世絵を借り出しては模写もしたという。図書館で画題となりそうな絵巻物などの古画を研究して、18 歳で文展への出品も試みている。

一方で、明治から大正期は、西洋の近代的な文化が日本に流入した時代でもあった。印刷技術の近代化も急速に進み、写真版やカラー印刷が普及するなかで、雑誌の出版が相次いだ。1910 年代に雑誌「白樺」で印象派や後期印象派が特集されたのをはじめ、当時ヨーロッパで起こったアール・ヌーヴォー、幻想絵画、フォービズム、キュビズム、シュルレアリスムなどの新しい美術運動の動向が次々に日本に紹介された。いわゆる正統な美術教育を受けていなかった初山も、こうした潮流に目を見張りながら、自分の美意識に従って吸収すべきものを選び取っていったのだろう。日本的な線と装飾性を土台にしながら、モダンな感覚を柔軟に取り込むことができたのは、まだ 10 代の若さや、どこにも属さない自由さもあったのかもしれない。

西洋の新しい児童観もこの時期に日本にもたらされた。子どもは大人とは違う独自の存在であり、その精神の自由と教育の重要性が求められるようになり、児童文芸誌の創刊も相次いだ。1919 年に創刊した「おとぎの世界」もそうした雑誌のひとつだった。21 歳でこの雑誌の主筆に抜擢された初山は、子どもに向けて童話や童謡に絵を描くなかで、はじめてこうした“子ども”の世界があることを知ったのではなかったのだろうか。早く手に職をつけて自立することを求められた子ども時代を過ごしてきた初山

にとって、子どもの世界は、まぶしく美しいものに感じられたに違いない。以後、数多くの童話や童謡に絵を描き、ときには絵とともに詩や童話も手がけていて、そこにも初々しい童心を見ることができる。持てる技術と想像力を駆使して描かれた初山の童画は、子どもそのものの世界というよりも、彼自身のなかの子どもがつくり出した、ユートピアのようだ。初山の童画のなかでは、動物も鳥も、虫も、草木も花も、子どもたちも、妖精も、等しく遊び戯れている。

初山は西洋や日本のさまざまな物語に応じて自在に画風を変化させることができるほど、バリエーション豊かな表現をもつ画家だが、どの絵も一見して初山の絵であることがわかる強烈な個性を放っている。ユーモアと愛らしさに、妖しさもはらんだ、デフォルメの効いた絵であり、磨き抜かれた揺らぐことのない美意識に貫かれている。そのため、戦争の時代には、戦争賛美の絵を進んで描くことができずに、食うに困ることもあったという。

1950年代後半以後の作品は、印刷技術が進歩して次第に繊細な色使いが再現できるようになったこともあり、初山の童画もより色彩豊かになっていく。水の波紋やきらめき、太陽や月や星の光、虹、風、雪、鳥や蝶の羽、つる草、木の枝や芽や実、葉脈や年輪、可憐な花々……。そうしたものが、優美な線や抽象的な形態、細かな点描、水彩のにじみやぼかしをはじめとするさまざまな技巧を駆使して表され、画面を装飾的に彩っている。60歳から始まった教科書の装丁のための絵は、この装飾性が存分に発揮されていて、宝石箱のような美しさだ。そのきらめくような教科書を手にした子どもは、どれほど心を躍らせただろう。初山は生涯にわたって、子どもたちの心に美しい夢の種を蒔き続けた。

初山の没後50年を経た今、日々新しい絵本が出版されるなかで、「童画」ということばは使われなくなって久しいが、日本の近代の幕開けの時代に、まだだれも歩んでいない子どものための絵を求めて、新たな道を切り開いた画家の作品に、いま一度目を向けたい。その絵は時代を経てもみずみずしさを失うことなく、驚くほど新鮮で、子どもだけでなく大人の目も喜ばせる。日本の近代の大切な画家のひとりとして初山滋を位置づけ、今後の研究につなげていきたいと思う。